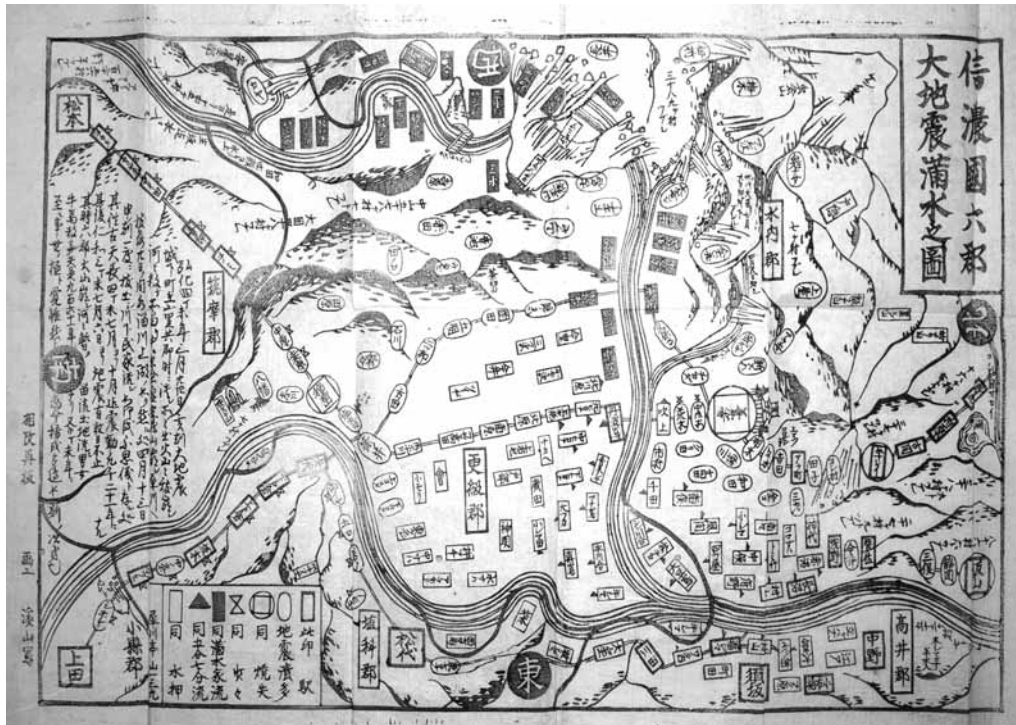


1847年善光寺大地震のかわら版



信濃国六郡大地震満水之図（信濃国松代藩真田家文書26A あ3457、縦39.4cm×横59.2cm）

前回に引き続き、国文学研究資料館所蔵の歴史資料から紹介する。

この摺り物（かわら版）は、弘化四（一八四七）年三月二十日に起きた善光寺大地震の被災地地図である。出版日は七月二十日以降と考えられている。十九世紀に入ると江戸をはじめとする各地で大火・洪水・高潮・地震などのたびに被災状況を載せた木版刷りの一枚ものが大量に販売されていた。いわば現在の新聞の先祖である。

善光寺大地震は、長野盆地西側山すそにある五〇kmの活断層が動いたことによる直下地震で、マグニチュードは七・三、死者は一万八千人前後と推定されている。

絵の下、左から右、すなわち南から北に流れるのが千曲川である。犀川が左上から流れてきて右側下部で千曲川に合流している。合流点の右上に善光寺町（現在の長野市中心部）がある。この□に○の記号は家の焼失が多かったことを示す。

上端中央にある「西」という黒丸白抜き文字のすぐ右側には、岩倉山が崩壊し、その土砂によって犀川の流れを二方所でさえぎった様子が大きく描かれている。ここを起点に堰止め湖が出現し、四月十三日に決壊して下流が大洪水となった。この地点からすぐ下流の兩岸八つの村々は黒い四角で白抜き文字の記号になっている。これは洪水により家が流されたことを示す。さらに、絵の下半分中央から右手にかけての村々は四角で囲われたものが多い。これは善光寺平などの流域が広範囲にわたって浸水したことを示している。

岩倉山より上流でも川がせき止められたため浸水した村が一一描かれている。そのなかでも（信濃）新町は黒四角に○の記号になっており、火災と洪水という二重の被害に遭ったことが示されている。これに加えて地震それ自体により家屋の倒壊もあった。犀川の北側でも、虫倉山など五カ所の崩壊や地すべりが描かれている。

このような摺り物が発売されたのは、この地域に住む人々が安否情報を被災地域の人々に知らせようという欲求があったためである。また、被災地域の人々がこうした被災地図を手に知人の安否を確かめるために実際にこの地域を訪れる際にも使用されたという。

災害への直接的対処や長く続く復興にあたって、被災地の内と外での情報の共有が大切であることは現代社会でも変わらぬところはない。それは、東日本大震災後の社会を生きる私たち、すっかり少なくなった関連報道に接するときに実感するところである。

（渡辺浩一）

△参考文献▽

中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会『一八四七善光寺地震報告書』（二〇〇七年）PDF版